

2008年6月8日

アート・ドキュメンテーション学会
第2回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション
学会賞・推進賞選考委員会
委員長 波多野宏之

第2回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同推進賞受賞者

標記の賞につき、会員の皆さまよりご推薦いただいた候補のなかから選考の結果、2008年度の学会賞および推進賞として、下記3件の授賞を決定いたしました。

今後とも本賞の発展にご協力くださいますよう、お願いいたします。

第2回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞

[賞の概要]

『アート・ドキュメンテーション研究』、『アート・ドキュメンテーション通信』、その他の雑誌に掲載の論文・記事、図書、データベース、展覧会、ウェブサイトのなかから優れたものを選出。会員に限らない。

| | |
|------|--|
| 受賞 | 加治 幸子 氏 (元東京都美術館司書) 『創作版画誌の系譜 総目次及び作品図版 1905-1944年』(中央公論美術出版, 2008) の業績に対して |
| 受賞理由 | 本書は創作版画関係の逐次刊行物、いわゆる版画同人誌や連刊版画集、版画研究誌、版画団体の機関誌まで含めた111種(延べ912号)を収録して、明治38年から昭和20年までに刊行された創作版画誌の目次及び作品図版(9000余点)を1115p.の大冊として目録化したものである。そもそも少数の発行で、極めて限られた同人の中で頒布される資料であり、現物確認の困難は想像を越えるが、その難しさを越えてまとめられた本書は、今後日本近代版画史研究にとって最も基礎的な参考図書になるものである。 |

第2回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション推進賞

[賞の概要]

アート・ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者、あるいは機関を選出。会員に限らない。

| | |
|------|---|
| 受賞 | 木村 三郎 氏 (日本大学芸術学部教授) 美術史研究者の立場におけるアート・ドキュメンテーション活動、教育、研究、また近年のオウイディウスの『変身物語』プロジェクトにおける研究統括、デジタル・アーカイブ構築(http://ovidmeta.jp/)など一連の業績に対して |
| 受賞理由 | 木村三郎氏は、美術史研究者の立場からアート・ドキュメンテーションの重要性について深く認識し、本学会の前身であるアート・ドキュメンテーション研究会創設に大きな影響を与えたとともに、爾来、幹事、評議員として会の発展に大きく貢献した。研究会から学会への展開も同氏の提言に負うところ大である。他方、勤務先大学の図書館における西洋美術関係参考図書類の選書・収集に並ならぬ熱意を傾注し続け、極めて質の高いコレクションを形成しつつある。さらに同大学大学院における美術史教育において、とりわけドキュメンテーションの重要性を説き、若い研究者を多数育成しつつあることは、他の追随を許さないユニークなドキュメンテーション活動の推進といえる。なお、近年「17世紀フランスにおけるオウイディウスの挿絵と絵画の関係についての総合的研究」などにおいて学芸員・研究者等を統括し、デジタル・アーカイブ構築などの実践に当たっていることも評価に値する。 |

| | |
|------|--|
| 受賞 | 中島 理壽 氏 (美術ドキュメンタリスト・国立新美術館参与) 美術ドキュメンタリストとしての長年にわたるアート・ドキュメンテーション活動、とりわけ書誌・年譜等編纂に関わる一連の業績に対して |
| 受賞理由 | 2007年末に『美術家書誌の書誌：雪舟から束芋、ヴァン・エイクからイ・ブルまで』(勉誠出版)を公刊された中島理壽氏は、日比谷図書館を経て1975年、東京都美術館において日本で最初の公開美術館図書室の開室・運営に従事されて以来、一貫して美術分野の書誌・年譜等の編纂に力を注がれ、1986年からは美術ドキュメンタリストとして独立、一層その仕事の幅を広くして今日に至る。近年は、多摩美術大学芸術学科非常勤講師、国立新美術館客員研究員・参与をつとめられて、後進の指導に当たられながら、書誌等編纂の具体的成果をもってアート・ドキュメンテーションの活動を広く世に示した功績は、推進賞にまさにふさわしいものとして推薦する。 |